

西鶴

評論と研究

上

暉
峻
康
隆

西
鶴

評論と研究
上

中
央
公
論
社

昭和二十三年六月十五日 印刷
昭和二十三年六月二十日 發行

西鶴評論と研究上

定價 二百五十圓

著者 暉 峻 康 隆

發行者 栗 本 和 夫

東京都千代田區丸の内二ノ二

印刷者 勝 畑 四 郎

横濱市金澤區堀口八八

發行所

東京都千代田區丸の内二丁目
丸の内ビルディング五九二區目

中央公論社

電話丸の内五三五番
振替口座東京三四番

まへがき

西鶴が書けるやうになつて私は大變うれしい。といつても戦争中に書けなかつた西鶴が思ふぞんぶん書けるやうになつたからといふのではない。西鶴を全體的に把握して評論してみたいといふ私のながい夢が、やうやく實現することになつたからである。正直なところ今まではどのやうな自由が與へられても書けない状態にあつた。研究的にも評論的にも未熟な自分を誰よりもよく知つてゐたからである。

十七世紀も終りに近いころ、日本最大の商業都市大阪に西鶴といふ町人出身の作家がゐて、モウパッサンやバルザックのやうに愛慾や金錢のことを書いて相當の作品を残してゐるといふことを知つたのは、今から十七八年前、早稻田で故山口剛教授の講義をきいた頃からである。そのころ私は先生が好きで講義に出てゐたのであつたから、西鶴が偉大な作家であらうとなからうと實はどうでもよかつたのである。だから先生の講義だけはハンコをおしたやうに出席してゐたが、そのほかはもつぱら下手な創作に血道をあげて、何となく大學を出てしまつた。しかしどうしても先生と離れたくなかつたので、色々考へたあげく先生について近世文學を専攻することになつた時、どうせやるならといふので西鶴を當面の研究對象にえらんだのであつた。ところがその氣になつてみると、手もつけられないほど何事も整理されてゐない。まづ第一に完全な全集がないので、テキ

ストの採集整理がさしあたつての仕事である。小説の方はまあどうにか見當がつくにしても、俳諧の方は一體どれだけの著書があり、どれだけの仕事をしてゐるのかといふことさへもわからない。見當のつく小説の方にしてから、西鶴の序文や署名があつても俄に西鶴作と決しかねる「近代艶隠者」や「西鶴文反古」のやうな作品もあれば、署名も序もないが西鶴作と考へられてゐる「梶久一世の物語」や「好色盛衰記」のやうな作品があるといつた風である。そんな程度であるから西鶴歿後に刊行された遺稿集の制作年代についての考證などは、まづたく考慮のほかといふ有様である。これは大變なことになつた、とじつさいそのころ私は手をつかねる思ひであつた。しかもさういふ矢先に山口先生がなくなられて、私はまづたく途方にくれたのであつたが、當時二十五歳の私は絶望したりあきらめたりするにはあまりにもデスペレートであつた。險阻にむかつて勇氣をふるひ起すだけの若さを私は持合せてゐたやうである。

しかし何よりもそのころ私が勇氣づけられたのは、私よりも一足先におめす臆せず險阻に立ちむかふ人々の姿であつた。すでに片岡良一氏は明治大正期の西鶴研究の總決算として、すぐれた評論家的センスで総合的な「井原西鶴」を發表されてゐたし、それにつづく頼原退藏、近藤忠義、野間光辰、故瀧田貞治氏らのそれぞれ立場よりする研究と新資料の提供は、孤立無援の私をふるひ立たしめるに十分であつた。ユングフラウの征服がさうであつたやうに、この西鶴登攀は單獨でなしうる業ではない。すぐれた人々の熱意と経験と努力の集積によつてのみ山嶺に達しうるであらう。それには自分もまた應分の努力をなしつつ、おのづから時のいたるを待つべきである。とさう腰をすゑた私にとつて、これだけは私一個の努力と責任にまたなければならぬ問

題は、いかにして難解な西鶴を自由に読みこなすかといふことと、その読みこなした西鶴をいかなる方法によつて批判するかといふことであつた。

さういふ時も時、なくなつた先生の縁故で眞山青果氏の西鶴研究の助手として註釋の業に従事すること累年、三十歳をすぎるところには現代の小説をよむと同様に、西鶴の作品を自由にたのしく読みこなせるやうになつた。まことに大いなる恩寵であつた。

基礎的な研究がすすむにつれて、方法論に對する私の熱意は次第に高まつていつた。それより早く私が大學を出た昭和五年前後は、プロレタリア文學論が一世を風靡しつゝあつた。單に文學の方法としてのみでなく、人間としての不安と動搖から、私もまた左翼理論に熱意を抱かざるをえなかつた。さうして私はまづ唯物史觀によつてきたへられたのである。

しかし文學によつて自分の内に巢食ふ卑俗とたたかひ、文學によつて恥多い自分を高めていきたいとねがひ、文學研究に生涯を託した私は、文學それ自體の機能と目的を無視して、もつぱら文學の政治的効用を説く左翼理論に對してやうやく疑ひを抱きはじめた。たとへば左翼の公式主義者たちが近世文學について語るところをきけば、進歩的・建設的で階級意識が昂揚されてゐるといふ理由で、その階級なるものが封建的下層階級であつたとはいへ實は商業ブルジョアジイであつたといふ事實などは無視して、浮世草子よりもあの未熟な假名草子により高い藝術性をみとめ、西鶴の小説よりもあの過渡的な詩とも散文ともつかぬ談林俳諧をすぐれた藝術であるといひ、詩人なるが故に自我を確立せざるをえず、人間の類型化を企圖した封建的な身分制度から

必至の脱走をこころみた芭蕉を階級脱落者と稱し、時代の進歩的な階級的イデオロギイに背反してゐるといふ理由で、そのシンセリテイや藝術性までも否定してゐるのである。かういふ公式的な批判といふものは、文學を階級闘争の手段として以外に考へようとしなない極左的思考にほかならない。どのやうにすぐれた思想であらうとも、藝術的形象をとまはないかぎりそれは文學と稱しえず、しかも文學の本能であるところの説得性は、藝術的形象の度合に比例して發揮されるといふきはめて單純な文學の本質と機能でさへも無視してしまつてゐるのである。

いくらすぐれた進歩的な方法論でも、人の物差は人の物差だ。その後さらにデイルタイをよみテームに傾倒し、いはゆる文藝學に熱中した私も、やうやく自分を忘れて方法論をふりまはすことの無意味さを悟るにいたつた。私は主體的であるべきだ。私は私の物差を、しかし世間に通用する物差を作らねばならないと思ふやうになつた。

三十歳以後の私は、遅々としてはかどらぬ文獻の蒐集につとめるとともに、註釋學的研究、書誌學的研究、傳記學的研究、文學史的研究、社會學的研究に没頭しながら、一方において誰のものでもない自分の文學觀や方法をもちたい一心で、あらゆる小説や評論をよみふけつた。日くれて道とほし、さういふ感じであつた。そのころ西鶴を攝取して成長しつゝあつた武田麟太郎が、「西鶴が處女作を書いた四十一までには、まだ十年はたつぷりあるのだから、それまで待つて見てほしいのである。その時までには本當の小説が書けるやうにならうと、意氣込んでゐる次第である」といつてゐるのをみて、私もまた自分のはかどらぬ西鶴研究をかへりみ、

せめて四十になつたらとひそかに期するところがあつた。

それでも私はぼつりぼつりと根氣よく考證や評論を二十篇あまりも書いて、西鶴の塑像をきざみ上げ、どうやら近い將來に全體的な西鶴論が書けさうだといふ楽しい豫感に胸がときめきはじめた時、あつといふ間もなく中支の戦野になげこまれてしまつた。雨の夜行軍を一月もつづけ、急性肺炎で血をはいて昏倒した時も、長江名物の赤痢にやられて死にかかつた時も、追撃砲彈にとりまかれた時も、急降下銃撃で水筒を打ちぬかれた時も、これが最後だと思つたことは一度もなかつた。命數はまだつきてゐない。生きのびて仕事をつづけるんだと思ひこんでゐた。幸運にも豫感のとほり歸つてきてみると、武田麟太郎と瀧田貞治が死んでゐた。さうかうするうちに「西鶴新論」を書いた織田作之助も血反吐をはいて死んでしまつた。死ぬべかりし命をながらへて、今ここに多年心を傾けてきたライフ・ワークの一つをまとめることのできた倅せを思ふにつけても、敬愛する先輩知友の死をいたますにはをられない。私のこのつたない、けれども精根をこめた西鶴論を、諸氏の墓前にささげたい。

片岡良一氏が明治大正の西鶴研究の成果の上に立つて評論されたやうに、私もまたその後の研究の成果の上に立つて、西鶴を全體的・發展的に把握し評論したいといふのがはじめからの計畫であつた。田山花袋とか島村抱月とか正宗白鳥とか武田麟太郎とか織田作之助とかいふ作家や評論家たちは、自分の實踐的要求の範囲内で西鶴を論じてをればそれですむのであるけれども、私のやうに文藝批評家であると同時に文藝史家であらう

とする者は、西鶴の全貌を照らし出すことを目的としなければならぬからである。すくなくともこれまでのやうに、作品の題材によつて分類し、好色物、諸國咄、武家物、町人物と、各箇的に取上げて評論してゐたのでは、成長のはげしい多面的な西鶴の正體はつかめない。といふことになれば西鶴の文學的生涯を一つの流れとして追求するより仕方がないのである。

西鶴がもし近代の作家のやうに思想を重んじ、主知的に、したがつて計畫的に創作をつづけた作家であつたならば、流水にそつてなどいふのんきな評論はしてをられない。けつきよくは海に流れこむものであるにしても、ダムがあつたり堀割があつたり、右往左往しなくてはならないはずである。ところが西鶴といふ作家は、彼を取りまいてゐた思想よりも現實を重んじ、その現實のおもしろさに憑かれて衝動的に創作し、彼自身も思ひがけなかつたにちがひない人生の深淵をのぞき、人間の正體をあばき、しかも最後まで絶望することのなかつたもつともブリミティヴな作家らしい作家である。その上に幸か不幸か作家としての西鶴は、近代の作家のやうに批評の矢面に立たされることがすくなかつた。彼を動かす、彼の作風を變化せしめるやうな強力な批評の存在しなかつた時代であり、またその作風を左右するほどの文化政策も存在しない時代であつた。加ふるにスタンダールやロレンスのやうに、下層階級出身のデスペレートな精神をもつて、きはめて自主的といふよりは恣意的に創作をつづけることのできた作家なのである。したがつて濁つたり澄んだり泡立つたりはしてゐるが、それはきはめて自然な流れとして見ていくことができるのである。

しかしながらこの方法をとるには、何よりも作品の整理といふ基礎的作業を必要とする。まづ評論的價值が

あらうがなからうが、現在見およぶ限りの作品をあつめた上で、西鶴作かどうか疑はしい作品はそのいづれかに決定し、遺稿はその制作年代を考證し、最後にそれを制作年代順に配列しなければ仕事をはじめるわけにはいかないのである。

そんなわけで作品論とその基礎的研究とは切りはなすことのできないものであるが、これをそのつど挿入することになると、論旨がそれたり感銘が稀薄になつたりするおそれがあるので、それは別に一括し、評論と稱する以上當然ふくむべき評傳、世界觀、方法等に關する論說、および文學史的な考察などとともに、「西鶴研究ノート」として收めることにした。したがつて純粹に作品論としての評論篇と研究篇にわかれるわけであるが、何分一冊にまとめるには分量が多すぎるので、これを上下二冊にわち、談林の俳諧から「一代男」をへて「武道傳來記」までを上巻にをさめ、つづく「武家義理物語」をはじめとする武家物をへて絶筆「置土産」にいたる町人物と、それに晩年の俳風および「西鶴研究ノート」をくはへて下巻とした。

昭和二十三年一月上旬

暉 峻 康 隆

目次

まへがき

序章 西鶴の存在意義

西鶴の實踐的存在 (一三) — 忘れられた西鶴 (一五) — 寒月の西鶴發見 (一七) — 篁村と西鶴 (一七) — 最初の活字化 (一九) — 露伴・紅葉と西鶴 (一九) — 西鶴本翻刻の氣運 (二三) — 外國文學者の支持 (二三) — 隅外と西鶴 (二五) — 一葉と西鶴 (二七) — 鏡花と西鶴 (三〇) — 抱月・花袋の自然主義的西鶴觀 (三一) — 白鳥・青果と西鶴 (三五) — 自然主義的西鶴觀の限界 (三七) — 志賀直哉と西鶴 (三九) — 菊池寛と西鶴 (四三) — 宇野浩二と西鶴 (四五) — 武田麟太郎と西鶴 (四七) — 織田作之助と西鶴 (四九)。

第一章 風俗詩人西鶴

自由にもとづく俳諧 (五一) — 貞門俳諧の中世的性格 (五三) — 宗因と大阪 (五五) — 新興大阪の包容力 (五七) — 宗因の魅力とその限界 (五九) — 阿蘭陀西鶴 (六一) — 新風大坂獨吟集 (六五) — 矢數俳諧の流行とその本質 (六九) — 西鶴の詩人的資質 (八五) — 詩から散文へ (八七) — 嵐に立つ西鶴 (八九) — 散文への決意 (九一) — 連句と小説の素材的相通 (九三) — 矢數俳諧の進歩性と非藝術性 (九五)。

目 次

第二章

「好色一代男」

七

その前夜(九七)——一代男の盛行(一〇三)——代男の輪郭(一〇五)——スタイルの系譜(一〇七)——新鮮なる描寫(一〇七)——源氏物語との交渉(一〇九)——俳諧的手法(一一一)——源氏物語俳諧化の必然性(一二三)——光源氏と世之介(一二五)——世之介の近世的性格(一二二)——二代男のテーマ(一二三)——町人文化の讚美と主張(一二九)——反抗の精神(一三三)——青春の潔癖と純情(一三五)——西鶴の死生觀(一四七)——肉體の喪失(一四九)——世之介の内省(一五一)——一代男の文藝性(一五二)——青春の遺書(一五三)。

第三章

「好色二代男」

一五

二代男と遊女評判記(一五五)——二代男の古典的構想(一五九)——成長せる西鶴(一六一)——眞情の強調(一六七)——眞情の限界(一七二)——西鶴の心中觀(一七九)——遊里の肯定面(一八三)——風俗畫譜の様式(一八七)——二代男の結論(一九三)——遊里への訣別(一九五)。

第四章

「西鶴諸國はなし」と「懷硯」

一七

改題本「西鶴諸國はなし」(一九七)——在名本「諸國はなし」の意義(二〇〇)——前期上方町人のコスモポリタニズム(二〇一)——名所記と説話文學の流行(二〇二)——「諸國はなし」の創作動機(二〇三)——説話文學の脆弱性(二〇五)——西鶴の戀愛觀(二〇九)——説話の人間主義的解釋(二一七)——改題本「懷硯」(二二二)——金錢説話(二三三)——愛慾説話(二四二)——西鶴・伊勢物語・モウバッサン(二四四)。

第五章

「梔久一世の物語」と「梔久二世の物語」

二四

モデルとしての梔久(二四二)——梔久の性格描寫(二四七)——梔久のニヒルとデカダンス(二四九)。

第六章

「好色五人女」……………二六五
 五人女の成立條件（二六五）——古今俳諧女歌仙（二六七）——淨るり「曆」の失敗と「凱陣八島」（二六九）——五人女の構成と發想（二七三）——素材としてのお夏清十郎（二七五）——清十郎物語の構想（二七七）——清純なお七（二八一）——肉體の復活（二八五）——五人女の悲劇的性格（二八七）——幸福なるおまん源五兵衛（二八九）——集團藝術のエチケツト（二九一）——櫓屋おせん歌祭文（二九三）——おせんの性情（二九五）——性格悲劇（二九七）——享樂的都會娘（二九九）——過失の必然性（三〇一）——本能に生きるおさん（三〇三）——肯定より否定へ（三〇五）。

二六五

第七章

「好色一代女」……………三〇七

鵲外と一代女（三〇七）——花袋と一代女（三〇九）——一代女の構想（三一）——遊仙窟と九相詩（三一）——懺悔文學のスタイル（三一三）——風俗小説的意圖（三一四）——一代女の性情と肉體（三一五）——肉體の歴史（三一七）——絶望と悔恨（三二三）——一代女の慟哭（三二五）——憂愁小説の結論（三二七）。

第八章

「本朝二十不孝」……………三一九

二十不孝の否定的精神（三一九）——二十不孝の文學精神（三二一）——志賀直哉と二十不孝（三二三）。

三一九

——西鶴の町人的無感傷性(三三六)——二十不孝の文藝性(三三七)——二十不孝の勸懲意識(三四一)
——主題の喪失(三四三)——町人物の傾向(三四五)——男色大鑑への反動(三四九)——改題本「新因果物語」(三五〇)。

第九章

「男色大鑑」

大鑑の位置(三五三)——貞享三年好色本禁令説(三五五)——成立の必然性(三五六)——西鶴と上方劇壇(三五九)——大鑑の反動的性格(三六〇)——男色の歴史と社會性(三六二)——序章のはらむ疑義(三七〇)——武家の衆道描寫(三七二)——唯美主義的傾向(三七八)——町人物的衆道描寫(三八四)——暴露的傾向(三九〇)——武家物へ(三九一)。

第十章

「武道傳來記」

主體的テーマ(三九三)——習俗化した敵討(三九四)——非情なる説話文學精神(三九七)——敵討における人間關係(三九九)——敵討の動機(四〇二)——敵討の結末(四〇四)——過程の描寫(四〇九)

序章 西鶴の存在意義

西鶴の實踐的存在——忘れられた西鶴——雲月の西鶴發見——寛村と西鶴——最初の活字化——露伴・紅葉と西鶴——西鶴本繙刻の氣運——外國文學者の支持——鷗外と西鶴——一葉と西鶴——鏡花と西鶴——抱月・花袋の自然主義的西鶴觀——白鳥・青果と西鶴——自然主義的西鶴觀の限界——志賀直哉と西鶴——菊池寛と西鶴——宇野浩二と西鶴——武田麟太郎と西鶴——織田作之助と西鶴。

埋れても埋れきれずに再び浮び上つて來るやうな作品には、何處か本質的のところがある。西鶴などは確かにその一人だ。かれのものはこれからも何遍も埋められるであらう。そして何遍も浮び上つて來るであらう。(田山花袋)

時間と空間に支配されながらも、なほ營々として生きつづけてゐる古典にも、およそ二通りあるやうだ。主體的に創作の糧としてむかへられてゐる古典と、もつぱら享受のよろこびにつつまれてゐる古典である。それは人をして創造のはげしさへかりたてるものと、憩ひを興へるものととの相違であらう。西鶴の小説は前者の性質を多分に有し、「源氏物語」などは後者の性質を多分に有する古典といへよう。これを具體的にいへば、文學實踐にたづさはらない國民一般から無條件に敬愛されてきた「源氏物語」に對して、西鶴文學はもつぱら作

家側で恐れられ、いどまれ、愛されてきてゐるのである。

この相違は何にもとづくのであらうか。すべては中世を境とする文學の場の特権階級より庶民階級への移行といふ世界文學に共通のコペルニクスの轉廻によつてもたらされた現象であるにちがひない。「源氏」が家庭にむかへられたのはその貴族的な典雅さが保守的な家族制度に適應したからであり、西鶴が家庭からしめ出しをくつたのはその庶民的なあらあらしさ露骨さが嫌惡されたからである。これを一面からいへば「源氏」が創造的な面から敬遠されたのは、その貴族的な人間把握の脆弱さの故であり、西鶴が實踐的な人々にむかへられたのは、おなじ庶民的な場において夢よりも現實を、美よりも眞實を、地上的な人間の正體を追求した精神の故にほかならない。ことに地上的な人間の權威を打ちたてるために、神學的な中世的ないし封建的諸權威に對してたえずアンティテーゼを設定せずにはをられなかつた西鶴の革新的精神が、新しい人間の可能をうたひはじめた近代作家の魂にふれたのである。西鶴こそそのはげしい反説の精神によつて、時に抹殺されながらも現代に生きながらへてゐる唯一の作家である。

表面にあらはれたところだけを見ても、近代文學の黎明期である明治二十年代における篁村・紅葉・露伴・一葉・鷗外らの攝取を第一期とし、抱月・花袋・白鳥・青果など自然主義時代の關心を第二期とし、志賀・武者小路・菊池・宇野・武田・織田など大正・昭和時代の關心を第三期とすることができる。けだしそれらは直接的な影響とか攝取のみを意味するのではなく、各時代各作家の文學觀が西鶴を復活せしめたといふ面もすくなくないのであるが、ここに憩ひの文學としての「源氏物語」の神話的存在に對して、あくまでも近代的・實